龍神村の合併を検証

過疎に歯止めかからず 行政に声が届かない

市町村合併を検証しようと、前回の本宮町に続き、田辺市と合併した龍神村を訪ね、新婦人の会で活動する、古久保久代さん、赤石克子さん、山本直子さんと、２００７年に「龍神村の合併は何を残したのか」を本誌に投稿していただいた古久保健さんに、合併してどうだったのか現状と感想を語っていただきました。聞き手は九鬼副理事長、柳田理事、大前事務局長です。

古久保健さん、古久保久代さん、山本直子さん、赤石克子さん

議員は12人から1人へ、職員も減った

大前：２００５年（平成17年）に合併しましたが、田辺市全体の人口は合併した当時８万５千人から７万２千人と８割ほどになっています。龍神の人口は合併時の４千５百人から３千人と本宮と同様に６割ほどになり、市全体の倍位のスピードで人口減が進んでいるようです。ここに暮らしていて、どうでしょう、率直な話でいうと。

古久保久代：もうほんまに頭に来ることばかり、合併がどうだったかと言われれば、良かったことはほとんどなくて、一番困っているのは、田舎の片隅で暮らしていくことの困難さと、今後の不安。合併前、議員は12人で、各地区に議員が１人、２人いて、地元のちょっとしたことも言っていけた。だけどそれが今はゼロに等しい。今、龍神で議員１人ですよ。

古久保健：合併当初は３人おった。

九鬼：当初は旧町村ごとに定数を決めていたのですか。

古久保久代：そうでしたね。それから10年程たって、全市一区になり、１人になったのかな。田辺市の議員さん、減らして減らして、その議員さんたちが龍神だけでなく大塔なども一緒だと思うけど、山間部に足を運んでくれるのはほとんど居ない。この実態を見ないと、現状が分からんと思います。買物１つ、病院へ行くにしても、どんなに不安な生活を高齢者が送っているのか絶対分からんと思うのです。

しかもそれは日々進行している。私らの小さな字で子供は、小・中・高校生ゼロです。殿原全体でも小学生が５人もいない。発展する未来は考えられへん。私も含めて高齢者は、助け合いながら、どうやって暮らしていくか不安な方ばかり。こうした実態を行政がどこまで考えて対応してくれるのかというのが多々あります。

山本直子：私は、九州から大阪へ行ってここに来たんやけど、最初、龍神村というところはすごいとこやと思った。女の人がめちゃ元気なんよ。婦人会かな。

古久保久代：今は女性会やけどな。

山本直子：旅館のおかみとかが集まってね。村長、議員さ

わかやま住民と自治
発行／和歌山県地域・自治体問題研究所
和歌山市太田2丁目14-9　太田ビル203号
TEL･FAX 073-488-3127
jichiken@crux.ocn.ne.jp　2022年 2月号
2022年1月25日発行　第335号　（月300円）

目　次

龍神村の合併を検証
過疎に歯止めかからず行政に声が届かない …… 1
六十谷水管橋崩落
市民の生活を支える安心安全な水道事業を …… 6
和歌山の地域おこし協力隊② …… 8
おしらせ …… 8

ん全員前に並べてね。みんな、いろいろ暮らしのこと、ゴミのこととか、どんどん追求していく。私が集会に行って、すごいおばちゃんらやな、すばらしいとこやなと思った。そんなことは一切できへん、今は、ほんまに。

古久保久代：議員も少なくなったけど、市の職員さんも少なくなった。しかも、龍神出身者が少ない。行政局に行っても知らん。田辺など他から来ると思いますが、龍神のことをあんまり知らんと思うのですよ。

柳田：今、何人行政局に職員いるの。

古久保久代：ざっと20人ぐらい。声を届ける議員さんも少ないし、行政の職員も少ない。それに加えて地元の職員さんが少ない。学校の先生らもそうで、龍神出身の人少ないね。それと、龍神出身の人でも、田辺市街へ家建てて、龍神へ仕事に通って来るとかですね。

龍神村のシンボル旧役場（龍神行政局）

行政区が広がると地域の要望に応じられない

私ら新婦人の会で、子供医療費を無料にしてほしいという運動を5年ぐらいかけてやったのですよ。そのときにも、なかなか請願しても聞いてくれない。それで3回か4回か請願署名をして、やっと、一昨年の4月からか。

赤石克子：それぐらいやな。

古久保久代：中学生までの医療費が無料になったのです。そんなときでも、田辺市全体でしないとあかんのやけど運動がしにくいのです。私らは一生懸命したのですけど、思いはあっても運動になりにくい。大塔も本宮も中辺路も旧田辺も一緒にというのはなかなか大変やった。なので、行政区が広くなるということは、住民が求めている、そういう暮らしに直結する課題に行政が手助けするという事になりにくいのかなと思ったりするのです。

赤石克子：行政に対して、自分が主人公やという意識が薄かった。それで、合併のときから、「えっ、私らの村は」と目覚めた、新婦人の会で活動したり、市役所の移転問題とか、私らが主人公で、行政へものを言っていいのだとストーンと落ちてきた。いろいろ言わなと思うのやけど、久代さんも言われたけど、遠いわけで、そこの行政局ならちょっと行って、こんなにしてよと言えたのが、田辺市へ行ったら、龍神はそうでも、本宮は、大塔は、旧市内はと言われたら、しゅんってなってしまう。さっきの子供医療費の問題でも、龍神の要求はつかみやすいのやけど、ほかの3か町村と旧田辺市内、どんなに思っているか、すごく運動がしにくい。今、タクシーのことやってるけど、龍神内は分かるけど、ほかのとこは分からない。一緒に足並み揃えて行くのはすごく難しいのです。

龍神村の合併時のたたかい

古久保久代：私らは新婦人の会として、平成15年龍神村議会へ「市町村法定合併協議会への出席留保を求める請願」を出した。反対と違う、ものすごい優しい請願やで。協議会へ出席しないでという署名をとって、各議員さんにアンケートをとって、議会へ行って、村長さんを前に必死で言うたのを今思い出す。結局、議会選挙があって、合併推進の候補者が出され、合併することになった。でも、自分たちのできる限りはやった。

赤石克子：区会とか行って、田舎の区会は、男の人の発言権が強いから、私たちは言うのしんどかったし、隣のおばちゃんは賛成しているのに、私は反対ですと言うのは勇気いった。あとで子供らに、私らこれだけやったんやと言えるように、悔い残さんように闘いはしましたね。

古久保久代：議員さんアンケートで、賛成、反対、保留というのをとって、全員から返事を頂いて、それをまとめて会員へ配ったり、私ら殿原のところでは、一般のお母さんたちがね、合併反対のデモ行進したのを覚えてませんか、デモ行進。

山本直子：どこでしたん。

古久保久代：丹生川からずっと歩いて役場までした。

古久保健：基本的にね、国が合併をしたかった。今回の合併の基本は、１０００兆円の国の赤字を賄う方法というとこから、地方自治を縮めるほど国は交付税の必要がなくなる、政府が進めてきた市町村合併というのが今回の平成の合併だったと思う。

赤石克子：そやったんか。

山本直子：国主導なの。

古久保健：１０００兆円という赤字をいかに交付税で減らそうかっていう、これが主体、その合併以後、大体年間50万人位、日本の人口が減っていくのも人口減少と過疎というのが結びついていく。過疎、山村地域での生活がもうできない状況。日常生活が成り立てへん。そやから龍神村で、3年ほど、合併問題を反対賛成でなく、とにかく考えよという運動を始めて、３００人余りの賛同を得たわけです。結局、行政は聞く耳持たんという。

赤石克子：村長さん初めは良かったんやで。「きらりと光る、小さくてもおかいさんをすすってでも生き延びるって」言うて。こっち向いてくれとったんや。

古久保健：初めはそうや。

「市町村合併はどうなる」村長を招いた母親集会（2002年９月）

赤石克子：そやけどいつ頃か。ころっと変わった時点があって、人が言うには、東京へ行って一晩で変わったという話も聞くんやけど、当時は、小泉首相か、国の方針を、肩たたきをされて、仕方なく村民の期待を裏切ったんかな、というふうに、私ら思うんやけど。

古久保久代：研究所の佐古田さんには随分お世話になって、何回かお話も聞かせてもうたりな。

古久保健：最後まで頑張ってくれたし。「合併を考える会」を結成して、村議会議員と集団で協議をした経験もある。けど、そのとき、議員は自分の意見は全然言ってくれなかった。だから、夜、私宅へ伺うて、反対をしてくれという願いをしたことも。そういう活動をしても何の成果もなかった。既定路線を進めるというような、全国的にその流れがあったと。合併は田辺市への吸収合併。大きいとこに巻かれて、これもう全国的にそうだったように思いますね。合併というのが政府与党の思うままに乗ったっていう結論やと思いますけど。

柳田：みなべ町も最初、田辺市に含んだ広域合併、10か町村から7、8になり6、5になり、ずっと変遷して、みなべ町女性の会が住民アンケートをとって、それを見習って町もとったら、広域合併ではなく、南部川村との合併がいいという意見が多かった。運動も大事やし、町長自身がそのことを受け止める、そんな町長だったので、見本になる合併って言うのやけどね。

赤石克子：すごいなあ、それは理解できますね。

柳田：みなべ町と南部川村の、梅を中心としたまちづくり、目的ある合併で、その当時評価して、その後、いろいろ問題もあるけども。龍神村でもすごい運動をされたし、県下的にもすごい運動があって、県が最初、7郡市の広域合併を考えていたが、広域合併は、那賀郡の5町と、田辺の1市2町2村、この2つになった。合併しなかった北山村もテレビで、人口増えてるとか言われています。

赤石克子：ありますよね。

柳田：単独で残った町村が、今、目的持って頑張っているというかな、古座川町や太地町など。国の宣伝の財政的にも大変になるとか、そんな脅し文句で追い込まれていったけども、そうではなかったということが、はっきりしてきてると思う。そういう選択は、自分らの力だけではいかない、いろいろな力関係になってくる。県下的には今そんな状況が生まれてきてるということだと思うのです。

やりくりで要望に応える小さな自治体

山本直子：人口増えてるのや、北山村って。

柳田：子育ての政策が、しやすいから移り住んでくる。

赤石克子：太地町とか北山村とか、私ら新婦人の会で調べたら、教育費ようさん要るからと、学用品を無償にしてた、北山村とか。

古久保久代：給食費なんかも無料になってる。

赤石克子：小さな自治体がそれをやっているのを見たら、うらやましくて、うらやましくて、龍神村ならできたかもしれんと思って、お母ちゃんらが子育てしやすいように何かしてあげられるのやけど、田辺市やったら無理やと思う。

古久保久代：小さな自治体やったらもうちょっとな。

赤石克子：やりくりして、出来るわけや。そうしたらまた住んでくれるかもしれへん。今みたいに若い人は田辺の秋津とかに住んで、龍神の農協へ通ってきたりしている。龍神村やったらすぐにできたのに。

古久保久代：最初、合併するときに、行政の各分野を旧町村に振り分けて置くとかという話もあったけど、そんなこともなかったし。

山本直子：龍神といえば温泉が売りだと思うけど、龍神温泉は合併前までは４００円で入れたのよ。近所のおいやんも、以前やったら盆に孫ら来ても「温泉に行こら、わし出しちゃる」て言えたけど、今みたいに８００円になったら、よう連れていかんと言ってね。４００円のときは龍神村の人がよく行っていた。娘がアトピーで龍神温泉に行く機会が多かったけど、この10年程、行っても地元の人誰もおらん。

柳田：地元の人の高齢者に対する割引制度とか、そんなんないの。

山本直子：ない。※障がい者は４００円

柳田：みなべ町なんかは、70歳以上の人は３００円、国民宿舎や鶴の湯温泉では。そんなん、どこでもあるのちがうん。

大前：僕とこも、湯浅もある。

柳田：日置川の昔の国民宿舎、あそこらでも地元の人、割引券持っているよな。

山本直子：合併したその次の年位に、真砂市長さん来てくれて、各地区回ってくれた。近くの公民館で懇談会があって、区長の奥さんが「温泉は区民が入って、他に広めていくのが大事なことや」と一生懸命言ってね、みんなで拍手したんやけど、市長さん「はいはい」って言ったけどな。その後何もしてくれへん。地元の人が、もり立ててこそ龍

神温泉も、広まっていくと私も思うわな。

過疎でインフラの不安

柳田：本宮でこの間、話聞いたら、大変な状態になっている。紀陽銀行でも職員2人おるけど、公金以外の出し入れは全部ＡＴＭで。

山本直子：ここらはまだ引き出せるな。

柳田：本宮は既にそんな状況で、農協も、そういう方向へ動いてきている。

赤石克子：いつまで「きのくに信金」さんがおってくれるかって。

山本直子：ゆくゆく、ガソリンスタンドなんかも心配やと思う、今は何とか数軒あるけどな。

柳田：本宮で話聞かせてもうたのは医療の関係と、地域交通の問題で、新宮の高校へは、コミニティバスと熊野交通で間に合うけども、田辺は始業時間に間に合わないので、下宿なり、家族が田辺へ転居する。

山本直子：高校に行くのも、龍神内をバスが通っていたけど、一昨年かな、ここの西までしか来なくなり、奥の人はここまで送迎しないとバスに乗れない。

柳田：出てこなあかん。

山本直子：そうそう、毎朝西まで送って、帰りもまた迎えにいかんなん。

日本三美人の湯　龍神温泉

地域の産業振興は

大前：龍神の産業は、龍神温泉の話があったけども、林業とか農業はどうなんですか。

赤石克子：業としての農業はほぼないね。

柳田：北山村なんかは、人口４００人ぐらいかな、そんな中で、仕事も、じゃばらの収穫時期はその仕事をして、夏場は筏下りの仕事をして、よそからの転入者を受け入れている。医療費や教育費も要らんし、仕事もある。それで移住者が来る状況がある。

本宮では、何町歩の田畑が放棄地で、今まで米とお茶を栽培してた。その人は、遊ばせておくのはもったいないと、古座川町のユズの取り組みなんかを紹介したら、そういうとこも見に行って、地域おこし、産業おこしできないかという話もやってるんやけどね。

赤石克子：ちょっと教えてほしいのですが、小さな自治体は単独でもやっていけるのか。また、過疎は、日本の今の政治状況やったら、進んでいく、歯止めはかからんのですか。

柳田：基本的にどこの自治体も財政的には大変やと思う。でも、合併に参加せんと来ている自治体は和歌山でも全国にも幾つもあって、みんな、知恵出して頑張ってる。「小さくても輝く」という全国のフォーラム開いたり。

九鬼：食べていけるような農業、地域産業を発展するような政策、国が取らない限り、地方は減少していく。根本は国にかかっていると思う。市町村も独自の努力で地域の特色を生かして頑張るところは増やそうとしている。

大前：国の行政がたとえ悪くても、住民を守るという立場で歯止めをかけるというのが自治体の役割と言われた時期がありました。Ｕターン、Ｉターンの話にしても、紀美野町やかつらぎ町、古座町など過疎の地域やけども、地域おこし協力隊の人を毎年連れてきて、そこの地域に住まわせることをずっとやってますからね。

古久保久代：過疎に歯止めをかけるような田辺市政やったらな、私らもまあ未来はあるんやけど。

山本直子：田辺市もこうするとか、林業とか、もうちょっと産業を振興してもらうとかよ、ほかによ、ＩＴちゅうか、その仕事で、ここで住むっていうことも今の時代はできるんか。

古久保健：龍神で基幹産業、地域で生きるための就職やな。以前は、林業その片手間に農業をすると、林業立村。国有地、国有林があるし私有林も龍神は多い。例えば白蝋病は、機械化によって20数名でしていた1年間の仕事量を4人でできるようになった。その副産物として白蝋病が残った。住民は白蝋病だけ頂いて苦しい生活を強いられた。これは国有林経営のせいやった。今の国有林の状況は、植えてそのまま手入れはもうしない。営林署に人がいない。もう林業では食えないという。農家もほとんどいない。住民がどう生きていくのか、現実的に僕自身も悩んでるわけですけど。

九鬼：森林組合はあるんですか。

古久保健：あります。森林組合の仕事も減っているな。でも、何人か外からも雇ってはいるで。

赤石克子：よそから来てる人もおるし、ここへ住み着いた人も何人かいます。林業も私らが考えられんような機械化がすごい進んでるようで。

古久保健：枝打ちも、伐採も全部機械でしょ。

赤石克子：女性でもできるように。

古久保健：少々、道なくても移動できる。機械化されたために、1人か2人が機械使えば、山から木を切って出すのも全部機械になってきてる。

赤石克子：スマート林業やな。

九鬼：「小さくても輝く自治体」の中にね、北海道とか岡山県で、林業を主にしたまちづくり、木材を多目的に活用できるように行政が応援して産業を発展させている。林業だけでなしに、地域の特色を

生かしたまちづくりが大事になっている。

赤石克子：田辺市の予算をいかに龍神へ使ってくれるかやね。やっぱり人口の多いとこが多いんと違う。

古久保久代：庁舎のこと考えたら一番わかりやすい。

自治機能を持った地域協議会

九鬼：合併したとこでも、旧町村毎の協議会をつくってるとこがあり、議会ではないけども、公選で協議会を選んでいる。たしか新潟の上越市、そこへ市から例えば１０００万予算を付ける。それは自由に使ってくださいと。

赤石克子：活性化協議会という協議会はあるけどお金付いてないわな。

九鬼：地域協議会の中で、何に使うかというのは任せる予算を確保する。平成の合併時での地域の運動での産物、自治力が生かされた取り組み全国の教訓として聞いたことがある。

赤石克子：自分らもそれやっといたら良かったな。

九鬼：それを本宮や大塔、中辺路でもやる、龍神だけでは駄目ということになるから。

古久保健：地域の特性を出そうと思てやっても、右へならえでないと、ここにだけは金出せんと。

古久保久代：まだ龍神には、新婦人の会など、要求運動をする団体があるけれど、中辺路、大塔、本宮はどうなんかな、若いお母さんらの願いが、届ける受皿がないわけで、いろいろ思てると思うけどさ。今やったら、給食費ただにしてほしいとか、学童保育を田舎でもしてほしいとか、それは吸い上げてくれるとこがないからね。

九鬼：「小さくても輝く」の教訓を聞くような催しを、今日のような小集会をもう少し広げたような、西牟婁のどこかで考えてもと思う。

古久保久代：いいですね。合併問題の時、佐古田さんら、学習会をここでやってくれたりもしたんやけどね。

山本直子：そやけどなかなかそのお金を付けるまで難しい。

九鬼：お金の確保はかなりの力がいる。世論としないと難しい。

ＮＰＯの有償タクシー事業

大前：ここのＮＰＯで、自家用車で送迎事業を行う事業をやろうとしていると紀伊民報で見ましたが。

古久保久代：アンケートとって、結論としてはＮＰＯが有償タクシーをやってくれる。結構お高いけれど、ないよりましやから、私らはそれ後押ししようと、最近やっと行政も入ってきた。それを使いやすいもんにするために私らもやらんなんし、区の人たちも分かってくれるようになって、みんなでやれるとこまできています。とにかく足を確保するのが一番やけどな。

山本直子：ＮＰＯの方が、取り組みを始めて10年ぐらいっていうたんか。

赤石克子：行政がな、もうちょっとやってくれたらなと思うけどな。そこまでやってくれへん。

古久保久代：世論がな、龍神やったらタクシー何とかしてよという世論高まってきてるけど。

地域の連携を図れるように

柳田：龍神と同じように本宮、中辺路も、過疎地として同じ悩みを持っていて、願いや要望は、龍神と変わりないと思うんやね。ただ、要望を吸い上げたり、組織する人や組織がないから、運動にならない。それを何とかする、仲間をつくっていかなんだら進んでいかんやろから。

赤石克子：自分らで精一杯やもんな。

九鬼：研究所も力ないけども、ちょっとは、応援というのか、連携の仕掛けはできるかなと、可能性を探りたい。

赤石克子：田辺市の同じような悩み抱えてる地域の人同士の連携が取れるような、ことがあったら。

九鬼：そういう動きが見えてきたら、こっちでも、頑張ろかという。そんな、相乗効果になり、つなげるようになってくる。

赤石克子：はい。それがあればうんと力になる。是非とも力を貸してほしいと思います。

九鬼：どこまでできるか。

古久保久代：自治体問題研究所としてお願いしたいところで言うと、地域協議会へ予算を付けた、全国のこんなとこがあるというのをきちんと教えてほしいのが１つです。

　それから、県内でも北山村とか古座川町、太地町のように、小さくても住民と知恵を合わして、いい行政を進めているところがあると言われたので、政策も含め教えてほしい。

　それからもう１つは、大塔、中辺路、本宮でも同じような悩みやと思うから、地域での連携が組めるようにアドバイスや手立てを考えてください。よろしくお願いします。

古久保健：自治体問題研究所で、こういう場面を県下で幾つか持って、情報を流してくれるんやと思うんやけど県民がそれを読める、いわゆる知る機会というのはどうなん。

大前：ホームページへ載せて見ていただくとか、方法としたら幾つかあるので、考えたいと思います。

九鬼：もうちょっと何か所か、本宮とここと、あと２、３か所もう少し実態を聞きたいと思っているんで、その段階でどういうやり方があるか考えたい。

大前：本当に貴重な御意見と宿題も、幾つかいただきました。私らも勉強させていただいて、少しでも皆さんのお力になれるように、また研究所へも御協力よろしくお願いいたします。これで終わっていきたいと思います。

六十谷水管橋崩落

市民の生活を支える 安心安全な水道事業を

10月3日和歌山市紀ノ川にかかる「六十谷水管橋」が崩落して、和歌山市の紀ノ川北岸の約6万世帯（13万8千人：市全体の4割）が断水しました。復旧するまで約一週間市民は不自由な生活を強いられました。和歌山市水道労組の伊藤書記長と水道局OB根来理事に現場の様子や今後の対応への要望を聞きました。

６月中旬の送水をめざして進む復旧工事

大前：事故が起こった時はどうでしたか。

伊藤：午後４時に担当者が現地調査で崩落を確認して、送水ポンプを止めた。私は５時過ぎに職場へ行きました。ちょうど日曜日だったので、人の集まりに時間差がありました。

断水するのは判っていたのでまず病院関係への対応をどうするとか、大型メーターの事業所への周知、ホームページとかＳＮＳ関係、防災緊急放送での住民への周知、翌日からの給水活動の準備を始めたり、４台の市の給水車だけでは足らないので、水道協会を通じて、全国へ給水車の応援を要請したりとか。もう全て同時並行でした。

大前：混乱した状況ということですか。市民はいつから断水というのが分かりにくかったといいますが。

伊藤：どうしても地域によって、断水の時間が違うので、その広報の仕方が、８時やったら８時にきっかり水が止まるわけではなく、復旧して出だすのが１０時頃から出ますよと言っても、出ないところや出ても濁ってるなど一律に言えなかったのが難しかったと思います。

大前：断水は決まっていたが広報の仕方難しかったという感じなのですかね。

伊藤：そうですね。時間が伝えられなかったり、時間差のところで。

大前：約30箇所に給水所を作ったということですが、

伊藤：給水場所は、小学校、中学校をメインで給水所を作り、給水車から受水槽へ水を入れて給水しようとしたのですが、学校によって水を入れにくいとか個々に違い、現場の判断で対応しました。

大前：給水時は混乱し、２時間待ったということもあったようですね。

伊藤：時間帯や場所によって混雑したり、受水槽に入れられなくて給水車から直接給水した所もあり、それが空になったら、水を浄水場で入れて戻ってくる。もちろん最低2台でカバーしてたのですが、渋滞も激しかったのでそうなった。

大前：何台くらい給水車が回ったのですか

伊藤：給水車は県下、全国から派遣を受けてピークで、１８０台位ですね。でも病院が最優先なので、病院のタンクはなん十トンもあるので、２トン車、４トン車では追いつかず、給水所のところが手薄になったようです。１８０台来たのですけども、来てもらうのに時間差があって、大型の国交省や自衛隊のタンク車は少し日が過ぎてだったので、それが来るまでは、給水場所では大変だったというか。目いっぱいでしたね、それはもう。

大前：今回、緊急対応のマニュアルに沿った対応ですか。

伊藤：災害時における業務継続計画。よく言われるＢＣＰあるのですが、地震という自然災害であったら、住民の方にも一定の理解が得られやすいのですが、人災に近い形でこういう状態になったので市民に迷惑をかけ、感情的にも納得できなかったと思います。災害では、小学校とかに避難所

を開設しそこへ給水するのですが、今回、自宅で生活しながらという形だったので、水の持ち運びというのが、よけいに住民の方に負担をかけた。

大前：職員の体制とかどうだったのですか。

伊藤：日曜日に橋が落ちて、翌日朝7時から給水活動をしたのですが、30か所やるのに最低2人いないと、

大前：60人必要ですね。

伊藤：そこに張り付くだけでなく、車を運転する職員、住民に説明する職員もいるし、尚且つ通常の仕事もしなければいけないというところもあったので。

実際給水所は3、4人は必要で、学校では先生が助けてくれたり、民生委員の方とか、ボランティアの人も応援してくれました。

大前：和歌山市の水道の問題と言えば、以前水道労組の中野さんが研究所の月報に投稿してくれて。1つは老朽化の問題にうまく対応できてないというのと、大滝ダムの分担金の負担が重くのしかかっていると書いていましたけども。

伊藤：老朽化問題でよく言われる、水道管は耐用年数40年と言われますけども40年たっても大丈夫な管は普通にあるので、40年というのは、あくまで減価償却の期間で耐用年数というわけではないように思います。それよりも、施設の老朽化ですね。配水池であったり、浄水場であったり。そこが一番大きいかなと思います。浄水場が老朽化で故障したら、水を作ること自体できない状態になる。

大前：加納浄水場は改修をしているのですね。

伊藤：工事は、来年から本格的になり、1年では終わらない可能性があります。浄水場は2つ加納と出島がありますけども、将来的に、加納を更新して出島を廃止して一つにする計画。今回の件でどうなるかですけども。そこは大きな問題ですね。

根来：事故の対策で、紀ノ川を渡す送水管の複線化や地下トンネルにするなど話されていますが、地震などの災害がおこれば、同じこと。浄水場を対岸にも建設しないと根本的な解決策にならない。その際、今の水管橋は緊急事態に備えたバックアップとして運用する。北岸の人口は和歌山市の4割。南側が6割というのだから、北岸にも最低1か所は必要。

大前：今では加納一本で行こうとしている。

根来：和歌山市の水道は全市給水でなく、中心部だけの給水だった。そこから給水地域を拡大してきた。

大前：周辺部とかなかったんや。

根来：川向うは、福島と島橋の2か所の浄水場から給水される地域で、水管橋の渡った六十谷から東の地域には給水してなかった。市の50万都市構想に対応して全市給水を基本とした拡張計画を打ち出した。それは、加納浄水場という大きな浄水場を建設し、将来的には1つの浄水施設でまかない、直送から配水池方式に切り替えるというものでした。

大前：それで、労働組合からでも川向うにも浄水場がいると。

根来：組合が言ったのは、北岸地域で将来何かあったときどうするのか。浄水場は絶対必要と主張してきた。だが、水道橋1本でまかなうとして2か所の浄水場は閉鎖してしまい。今回の事故での断水につながった。

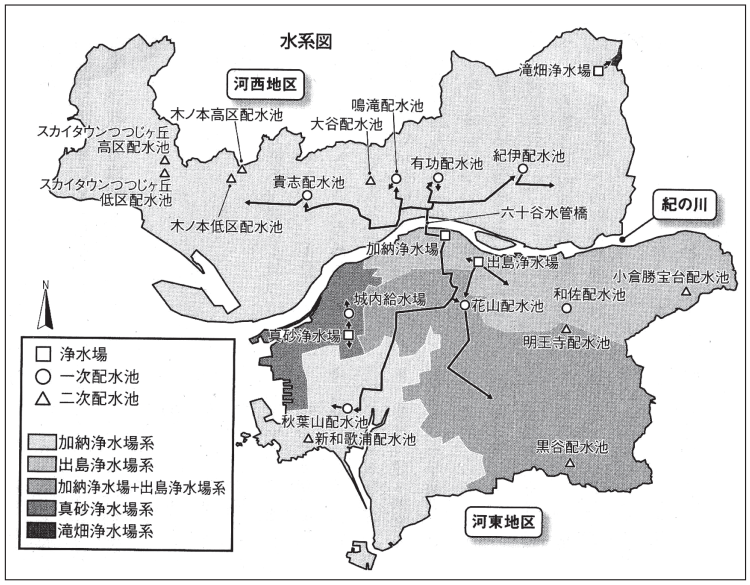
大前：今回の事故で水道労組で、アンケートを行ったと聞いたのですが。

伊藤：いろいろ意見が上がってましたが、多かったのは予算の問題ですね。修繕で漏水などで早く治せば少額で済んだのに、ほっておいて多額の費用がかかったというようなものですね。

根来：崩落の原因は別として、今後の対応で行政として安全安心をどのように確保するのかが問われ、何としても対岸に浄水場を新設する。そういう決断で行政の責任を果たしてほしい。さらに、公共インフラとして水道施設の維持管理に対して市・県・国に対する財政措置などについて方針を示してもらいたい。

大前：今回の教訓は。

伊藤：教訓はありすぎて、まとめないとあかんというのはあるのですが、水道の体制、人員もそうですし、修繕予算も取れない水道会計の問題も考えないといけないと思ってます。



和歌山市水道水系図　和歌山市水道ビジョン（2009年）より

和歌山の地域おこし協力隊②

地域おこし協力隊が広がるにつれ、募集しても隊員の募集がない。着任しても任務途中でやめる。３年後の移住につながらないなどのケースも増えているようです。今回募集や受け入れについて考えて行きたいと思います。

協力隊の上手な募集・OBのアドバイス

当研究所でも、「地域おこし協力隊」に注目してきました。２０１８年総会の講演で、新宮市熊野川町で活動し、ゲストハウスを経営する元協力隊員の森さんに３年間の活動を通じての気づきを語っていただきました。協力隊員の上手な募集方法として、「地区の活性」とか「観光振興」いう抽象的な目標でなく、「地域産物や空きビルを活用して事業を起こす」など、具体的でアイデアや自由度が高い募集。２００万円の協力隊員募集の広告予算を使って、地域の課題を一緒に考え、導入後のお世話もする中間コーディネーターを使う。協力隊の導入は行政が０から１を準備し、１から10を協力隊員に自由度を与えた状況でやってもらう。協力隊の導入手順は①地域の要望ヒアリング。②募集にはクリエイティブ要素を大事にする。③協力隊は２次、３次産業が得意で地域の一次産業とかけ合わせる。④下手な募集にはいい人材が集まらないと心得る。ことなどを語ってくれました。

受け入れに関する手引きから

総務省の地域おこし協力隊のＨＰでは「地域おこし協力隊の受け入れに関する手引き」を公開しています。手引きでは、協力隊員はそれぞれの人生における大きな決断をして移住し、慣れない生活の中での活動であり、受け入れ自治体は、業務面のみならず、生活面も含めサポートすること。自治体、地域、隊員の３者で「想い」を共有することで有意義な活動につなげていくことが重要と書かれ、受け入れにあたっての留意点、チェックリストがあります。

チェックリストは、ステージ１募集前、ステージ２募集・採用時、ステージ３活動中とあり、各チェックリストについて解説されています。一部を紹介します。

○受入準備にあたって

	首長はじめ、行政内部で協力隊の意義、狙いが十分共有できていますか
	受入地域は協力隊の趣旨・目的を十分理解していますか
	自治体と受入地域の連携体制は十分協議できていますか
	受入地域の主体性や当事者意識は十分ありますか
	任務終了後（定住などについて）自治体と地域で認識を共有できていますか

地域おこし協力隊は、自治体と地域の協力関係とか、将来ビジョンを描けているかなど受け入れ自治体の力が試される事業だと思います。次は、実際の現場の状況をレポートしたいと思います。

おしらせ

研究所のホームページ（ウエブサイト）を開設しました。

全国の自治体問題研究所のホームページのサブページとして開設しました。

今のところ、月報の「わかやまと住民と自治」の閲覧や新規の加入申し込み、お知らせなどです。今後充実させて行きたいと考えています。

ホームページには、「和歌山自治体問題研究所」で検索するかスマホでQRコードを読んでください。

和歌山県地域・自治体問題研究所
ホームページ